
SS集

みずしろ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SS集

【Nコード】

N5181M

【作者名】

みずしろ

【あらすじ】

ショートショート
SS集です。

サブタイトルごとに作品を載せていきます。

クラスメイト（前書き）

定期的に載せていけたらいいかなって思います。

それぞれの話でがらりと変わっても面白い。と思える物が書きたいものです。

お楽しみいただけたら幸いです。

クラスメイト

教室ではいつも一人だった。

学校では空気になり、存在を無きものになっている。もちろん友達もない。昼食を誰かと一緒に食べることもない。拳句の果てには、授業中先生に当てられたことすらない。

たまに誰かと目があつたと思って声をかけようとすると、いつも無視される。それだけじゃ飽き足らず僕の後ろに居たクラスメイトに声をかける。まるで虐めだ。

お返しと言つてはなんだが、仕返しをすることにした。

僕の席の横を通ろうとするクラスメイトの足を引っ掛けることにしたんだ。

みんなつまずいて転びかける。これで僕のことを無視できないだろうと思つたんだけど。みんな体勢を立て直すと首を傾げたり足元を見るだけだ。

そこまで僕のことを無視するんだ。僕にだって我慢の限界くらいある。

徹底的に無視されるから、もっと悪戯をしてやった。

僕の席に近づと思いつきり背中を押ししたり、殴りつけたり、突き飛ばしたり。

正直、最初はやりすぎたとは思ったよ。だけど、みんなそれでも無視するんだ。

そりゃもう反省なんてしなくなるでしょ？

だって、そこまで徹底して僕を無視するんだから。

僕だってクラスメイトなのに。

ひどいよ……。

怒りのままに傍を通ったクラスメイトの女子を思いっきり突き飛ばした。するとその女子は勢い余って窓ガラスに突っ込んで怪我をしてしまった。

保健室の先生が駆けつけた、皆騒いでその女の子の周りはやじ馬だらけになった。

そして、クラスメイト達はヒソヒソ話を始めた。
僕の席の方を見て。

なんでそんな目で見るの？ 悪いのは無視したみんなじゃないか。
なんでヒソヒソと話すの？ 僕に直接言えば良いじゃないか。

僕はそう訴えたが皆には届かなかったみたいだ。

それからというもの、みんな僕の席の近くを通らなくなった。誰

も近づかない。僕は悪戯さえもできなくなった。

そして、僕への無視はさらに続いた。

僕はずっと一人ぼっち。

どれほど時間が経っても同じ教室で。

クラスメイト（後書き）

いかがでしたか？

良かったら感想とか書いていただけると活力になります。
率直によろしくお願いします。

割れたシーサー（前書き）

沖縄にある。

家の守り神とされているあのシーサーのお話です。

割れたシーサー

俺はシーサー。この家を守っている。

何十年も前から、この家で。

人達は俺を守り神だと敬い。大事にしてもらってきた。まあ、そのお礼というわけではないが屋根で皆を見守っている。

とは言っても、毎日上から皆を眺めているだけなんだけどね。

しかし、台風の日はずがにきつい。雨やらなんやら、ほんと嫌になる。

でも、沖縄のいいところはやっぱり冬がないことかな。凍えることはないし、暖かいからみんなのんびり日常を過ごしてる。

まあ、俺もいつもだらだらしてるわけじゃない。

みんなの平和な笑顔。それが一番の俺の喜びだ。

俺がこの家を守りだしたところは悲惨だった。なんか、人間たちが争いで同類同士で殺し合いをした。あれはもう思い出したくもないな。

武勇伝ってわけじゃないけど、あの時が一番俺が力を発揮してたかもしれない。

まあ、俺は、そこらのシーサーと違ってエリートだからな。守る力も違うってもんだ。

でも、あの辛さはもう味わいたくないってのが正直なところ。

さてと、今日ものんびりと一日を過ごすかな。屋根の下は見えないけど周りのやつが元気そうだし家のやつらも元気だろう。まあ、俺の守る力は然るべきものだから安心だ。

ん？　なんだ？　何か飛んで来た！　よ、避け……

「げ、シーサーに当たっちゃった。お前があっちに打つからだろ」

「しょうがないだろ。当たったもんは……で、割れちゃったけど、大丈夫かな？」

ちょうど額に野球のボールが当たり、シーサーは割れて、欠片が屋根から落ちてきている。

「普通ならバチ当たりそうだけど……この家ならいいんじゃない？」

「いや、この家だから余計に……」

少年たちは買い手もつかず、廃墟となったこの家を眺めながら不

安が広がってきた。

「戦争の時、この家の中で集団自決があつて、それからこの家で不審死が絶えないってやつか？」

「そうだよ、この家に住んだ人はみんな不審死するって……」

少年たちは、怖くなってその場から逃げだした。

割れたシーサー（後書き）

SSを書きだして2つ目の作品。

一人称での書き方って難しいですね。

ピラニア（前書き）

動物を飼った経験がある方は多いかと思います。

大人になってからよりも小さい頃飼った時の記憶というのは楽しかったというよりも、もっと何かしてあげた。という後悔が多いかと思うのは作者だけでしょうか。

そんなことを思いながら書いた作品です。

ピラニア

少女は生き物が大好きでしかたがなかった。犬や猫も好きだが、一般的に好まれる動物よりも珍しい生き物が好きだった。

動物園でもパンダやキリンやゾウには目もくれず、他の動物園にいるかどうか、というような動物を見るのが好きなのだ。

野性的ない子だった。少女は中学生になり、周りの同級生は大人びようとして化粧を覚え出す。が、少女は相変わらず生き物を愛していた。

「化粧して、おしゃれしたらあんた可愛いんだから」

友達は口々にそういうことを言うてくるが耳を貸すことはなかった。

そんな娘のことが可愛かった両親は、クリスマスプレゼントにピラニアを買い与えた。

「お父さん、お母さん、ありがとう」

少女は涙を流し喜んだ。

「ちゃんと世話をするんだぞ。 私たちも手助けはするが、できるだけ自分で頑張りなさい」

両親は何かを育てるとするのは良い教育になると考えたのだ。だからこそ、ほしがっているものをプレゼントしたのだ。

少女は毎日世話をした。わざわざ川でエビや小魚を取ってくるほど熱心になった。

友達に毎日ピラニアの話をした。何度も何度も。やれ歯が鋭いだけの、餌を食べるときの刺激がたまらないだの。延々と友達に聞かせた。

友達も少女の楽しそうに話すものだから最初は快く聞いていたのだが、あまりにも何度も何度も同じ話をされるので飽きてきていた。

「ねえ、聞いて、今日ね、ピラニアが……」

友達に話しかけた瞬間、怒鳴りかけられた。

「うるさい。毎日毎日ピラニアの話ばかりで、あんたは楽しいんだろうけどこっちは迷惑なんだよ」

少女は怒鳴られたことにびっくりし、硬直して絞り出すように言った。

「ご、ごめん……」

その言葉で友達の怒りが収まるはずもなく、言葉は続いた。

「だいたい、ピラニアなんて飼ってる気がしないわ。しかも、それに夢中になっておしゃれも何にもしない。ほんとダサいのよこのゲジ眉」

「げ、ゲジ眉？」

「そうよ、あんたゲジゲジみたいな眉毛してるじゃない。太くて濃い。少しは整えなさいよね。そうだ、あんたがピラニアピラニアつてうるさいからこないだ調べただけどき、ピラニアの歯で眉毛切ればの人は散髪に使うらしいわよ。あんた、ピラニアの歯で眉毛切れば？」

少女はボロボロと大粒の涙を流し始めた。必死に堪えようとするが止まらない。

「なに、泣けばいいと思ってるの？ 本当にうっとうしいね、あんた」

そう言い残し、少女の前を去って行った。

友達が去った後、少女は駆け出した。耐えられなくなり、嗚咽を漏らしながら家へとたどり着く。

ただいまの挨拶もなく、泣きながら水槽を叩く。

「あんたたちのせいだ。ピラニアなんてもう知らない。好きじゃない。みんな死んじゃえ」

ピラニアは驚き、興奮して泳ぎ回っている。

騒ぎにかけつけた母親に止められ、やっとのことで水槽から離すことができ、なんとか落ち着かせることができたが、ピラニアに対しての憎悪はまったく収まらなかった。

年末のことだったが、少女はそれ以来、ピラニアを世話することが無くなった。

「ピラニアなんて見たくもない、捨ててきてよ」

両親に言ったが、捨てるわけにもいかず、家の水槽にはピラニアが悠々と泳いでいた。

少女が世話をしなくなってから、両親はピラニアの世話をした。だが、両親は魚を育てたことが一切なく、ピラニアに対しての関心は持っていなかったため、それは覚束ないものだった。

たまに、少女は影から、そんな餌のやり方じゃ駄目だ。水の変え方がなっていない。と思いはしたが、ピラニアなんて……。と意固地になり見ないふりをした。

やがて、ピラニアは次々と命を落としていった。

最後の一匹が死んだのは春先のことだった。

少女は水と藻だけが残った水槽の前に立ち尽くした。

「私のせいだよね……？ 私が世話をしなかったから。ごめんね。ごめんね」

水槽に顔をつけ、涙を流した。

両親も少女の涙を見て、可愛そうになり、水槽を早く片付けて忘れさせようとしたが、少女が断固拒否した。

「私、ピラニアのことを忘れないように、私がもうこんな罪を犯さないように残して」

そう言われると両親も手がつけられず、水槽は残された。

毎日水槽を見ると胸が苦しくなり、申し訳なさが心を痛みつける。

しかし、どうしようもなく、罪意識を感じるままに日々過ごした。

二週間ほどたち、両親が流石にもう水槽を片付けたくなくて、少女が学校へ行っている間に行動にでようとしたが、やはり、一度少女に話をしてから納得した上で一緒に片付けることにした。

夕方になり、少女が帰ってきた。

少女を呼び、話をしたが、首を縦には振らなかった。そして、夜、長い説得の甲斐あって少女は片付けを同意した。

「片付けてもみんなのことは忘れないから……」

目に涙を浮かべながら水槽に近づくと何か違和感があった。何か動いたような……

少女は涙を拭き、目を凝らして水槽の中を見た。

すると、再び少女は目に涙を浮かべた。

「みんな、おかえり、もうあんなひどいこと言わないからね。ちゃんと世話するからね、だから……私ちゃんとこの子たちを育てる」

少女は、太い眉の自分の顔が映った水槽をじっと見つめる。

その中には卵から孵ったばかりのピラニアの稚魚がいた。

ピラニア（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ピラニアの話を書きましたが、作者は飼ったことはありません。
犬が多いですね。

また次回読んでいただけたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181m/>

ss集

2010年10月10日22時03分発行